

相談支援つうしん

<第66号>2020年11月24日
県立湘南養護学校 支援連携部
相談支援係 ~教師編~

・ 学校規模ポジティブ行動支援について

以前にもご紹介した“**学校規模ポジティブ行動支援 (SWPBS)**”ですが、もともとはポジティブ行動支援 (PBS) として、1990年代にアメリカにおいて障害のある人たちの行動上の問題に対して、罰的・嫌悪的な方法を用いることへの反対運動が起源となって始まったそうです。時を経て、その取り組みは、アメリカ国内において約30000の学校で実践され、さまざまな児童生徒指導や停学処分等の減少に向けて、現在は多くの成果が報告されています。この取り組みが始まった経緯を考えると、不適切な言動を減らし適切な行動を増やすためには、罰ではなく褒める方法が有効であることが分かります。

では、SWPBSの内容を簡単に説明し、本校における実践についてご紹介します。

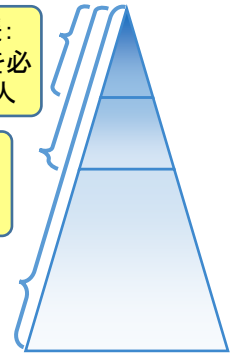
① すべての児童生徒を対象に、“問題の予防”と“問題の解決”に取り組む

SWPBSは、児童生徒全員を対象とした第1層から個人を対象とした第3層までの連続性のある支援システムです。第1層から取り組むことで、全体に対して問題行動の予防を行うことができ、第2、3層とより個別の支援が必要な児童生徒を絞り込むことができます。

第3層支援：
特別な支援を必要とする個人

第2層支援：
配慮が必要な一部の児童生徒

第1層支援：
学校・学級規模



② 指導可能な目標と場面を決める。

「あいさつをしよう」「廊下を歩こう」などの全体で取り組む目標を決め、「登下校時」「始業・終業時」といった実際に指導する場面を決めます。目標は“自分の目標をしっかりと持とう!”といったものだと指導や評価がしにくいので、子どもに大切にしてもらいたいことを具体的に記述します。

③ 目標達成に向けた指導の方法を共有する

たとえば、「あいさつをしよう」という目標であれば、先生が積極的にモデルを示して**モデリング**を促したり、挨拶をされたときとされないときの相手の気持ちを**ロールプレイ**を通して教えたりします。そして、実際に挨拶ができていられるのを見かけたら**褒め**、表を作って**記録を視覚的に掲示**します。

④ みんなで取り組む

児童生徒個人で取り組むのではなく、学年や学部などの規模で取り組みます。**目標を掲示**したり、実際の行動は**シール**や**メッセージ**とともに**貼り出す**などします。**先生も一緒に参加**できるとなおいいですね。

⑤ 成果を示して褒める

あいさつがどのくらい増えたか**取り組みの前後で比較**したり、月ごとに**達成の変化を掲示**して共有するなどします。また、個々の頑張りを**表彰**して強化を図り、動機づけを高めます。

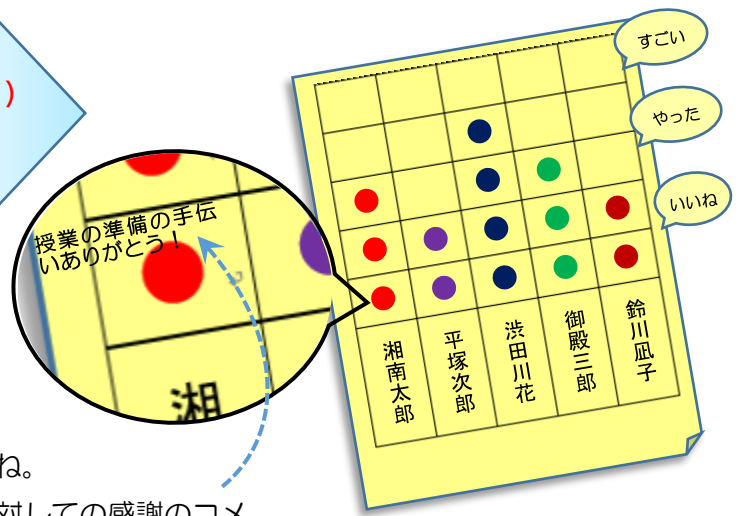
～校内の風景～

本校でも SWPBS につながる実践があります。高等部 1 年生では、生徒の望ましい言動を先生が褒めた際に、各教室の外側の掲示板に表を貼っています。この実践には次のようなポイントがあります。

- ① シールで視覚的に評価を積み重ねる
- ② 生徒全員が対象(参加している先生もいる！)
- ③ 月ごとに台紙を更新する
- ④ 表を掲示して全員で共有できる

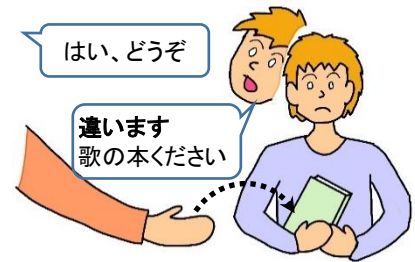
本校の取り組みのユニークな点は、一緒に先生も参加していることです。生徒たちにとってよいモデルになりますし、それをきっかけに生徒との関係作りにもなります。元々の取り組みにはない、本校オリジナルのやり方ですね。

また、シールをよく見ると、具体的な行動に対しての感謝のコメントが記載されていることに気づきます。こうした取り組みがスタンダードとなり、クラス目標や生徒会の月間目標とコラボして、SWPBS に発展していくことが期待されます。



✚ 要求言語の形成を図る～ボクが欲しいのはそれじゃない！ or いません！～

話題はガラッと変わって、本校では児童生徒の実態に応じて要求や報告のスキルを身につけています。要求スキルは、報告スキルに発展するための基礎となる重要なものです。一旦「●●先生、本ください。」といった要求スキルが獲得されたら、あえて要求とは違うものを提示して“それじゃない”という表現が適切にできるかどうかを確認します。子どもの中には、要求とは異なるにもかかわらず、“違う”とさえずにやり過ごしてしまう子もいるからです。できないときは、適切な拒否の表現方法を学習します。



また、“給食は全部食べなければならない”と決めている子どもで、苦手な食べ物を涙目になりながら丸飲みしてしまう子どもがいます。広くさまざまな食材を食べられるようになることも大切ですが、苦手なことを断るスキルを身につける機会として活用することもできます。左図は、高等部 2 年生のある生徒の中学部の頃の実践です。この生徒は音声の不明瞭さがある一方で文字でのやり取りができるため、PECS のコミュニケーションバーと組み合わせて拒否の意思表示をしていました。

この方法では、**●●先生**と**残していいですか**は文字カードで選択し、残したいメニューを空白のカードに自筆で記入していました。こうした実践を見ると、要求スキルは単に手に入れることだけではなく、“手に入れないことを要求する＝拒否する”ことも含まれ、そうしたスキルは段階的かつ計画的に指導が必要であることが分かります。

<参考文献>

行動分析学研究 34(2) (2020) 一般社団法人日本行動分析学会
応用行動分析学入門 (1997) 学苑社